

Endodontic microsurgeryの顎骨嚢胞治療への応用 Endodontic treatment of bone cyst using surgical operating microscope

群馬大学大学院医学系研究科顎口腔科学分野
須佐岳人, 久保田文隆, 小川 将, 米村裕樹, 横尾 聡
Department of Stomatology and Oral Surgery Gunma University
Graduate School of Medicine
Taketo SUSA, Fumitaka KUBOTA, Masaru OGAWA, Yuki YO-
NEMURA, Satoshi YOKOO



「緒言」

顎骨嚢胞治療の成功には、病変の完全な摘出と歯根尖切除術や抜歯など原因歯に対する処置を確実に行うことが重要である。歯根嚢胞は顎骨嚢胞の中で最も頻度が高く、歯根嚢胞に対する歯根尖切除術は口腔外科臨床では高頻度かつ一般的な口腔外科的手技のひとつである。しかし、その成功率は13.6%から97.0%と文献的に大きな差が見られる。われわれはKimら(J Endod 32: 601-623. 2006)により報告された実体顕微鏡を用いた歯根尖切除術、すなわちEndodontic microsurgeryを顎骨嚢胞摘出後の歯根尖切除に応用し良好な結果を得ている。今回われわれは、従来では開窓術(Partsch I 法)や摘出開放創(Packed Open法)の適応とされてきた、病変が3歯以上に及ぶ歯根嚢胞症例の一時閉鎖法(Partsch II 法)に応用し極めて良好な結果が得られたので、本法の術式および手術成績について報告する。

「対象及び方法」

対象は平成13年11月から平成22年4月までの8年6か月間に群馬大学医学部附属病院歯科口腔外科および関連病院にてPartsch II 法に本法による歯根尖切除術を併用し6か月以上の経過観察が可能であった3歯以上に及ぶ歯根嚢胞症例11例(男性5例, 女性6例, 以下Microsurgery群)と, 比較対照として術前に根管充填後, Partsch II 法後に肉眼的歯根尖切除を行った3歯以上に及ぶ歯根嚢胞症例8例(男性6例, 女性2例, 以下術前根管充填群)とした。部位別ではMicrosurgery群は上顎前歯部が8例, 下顎小白歯部2例, 下顎大白歯部1例, 術前根管充填群は上顎前歯部が3例, 上顎小白歯部が1例, 下顎小白歯部2例, 下顎大白歯部2例であった。なお, 本法は全例, Velvartら(Int Endod J 35: 453-480. 2002)によるPapilla base incisionにて切開を行い, 逆根管充填材は1例にSuper EBA (Bosworth), 10例にMTA(DENTSPLY International inc.)を使用した。術後の評価方法はRud & Andreasen(Int J Oral Surg 1: 195-214. 1972)らのエックス線学的評価基準およびGuttman & Harrison(Surgical endodontics. Boston: Blackwell Scientific Publication 1991)らの臨床的評価基準を用いた。

「結果」

嚢胞摘出後に肉眼的歯根尖切除を実施した術前根管充填群の成功率の50%と比較して, Microsurgery群の成功率は100%と良好な結果を示した。エックス線学的評価では術前根管充填群はComplete Healing3例, Incomplete Healing1例, Uncertain Healing3例, Failure1例。Microsurgery群はComplete Healing10例, Uncertain healing1例, Uncertain Healing, Failureは0例であった。臨床的評価では術前根管充填群は8例中4例, Microsurgery群は11例中11例に臨床的症狀がなく経過した。

「考察」

本法は、顕微鏡下における必要最小限の歯根尖切除と確実な根面処理、逆根管充填が可能であり、従来は開窓術(Partsch I 法)や摘出開放創(Packed Open法)の適応とされてきた3歯以上に及ぶ大きな歯根嚢胞に対して良好な結果を示した。さらに、技術的に逆根管充填が困難な大臼歯部に対しても有用性が確認された。